真鶴軽石流堆積物に見られる捕獲団塊

袴田和夫

Preliminary note on Manazuru Pumice Flow deposit

Kazuo HAKAMATA

箱根火山の南東部に位置する真鶴半島一帯は，箱根起源のテフラの主要分布域から外れているものの，古期外輪山活動期の末期から新期外輪山活動期初期にかけてのテフラが何枚も重なっている。特に真鶴軽石(TAu-12)は厚さ4～5 mのデイサイト質降下軽石層で，真鶴半島を構成する溶岩流の噴出時期を決める上で重要なものである（久野　1952，町田ほか1974）。

ここで真鶴軽石流堆積物と呼ぶものは，真鶴軽石層の上位に30cmほどのローム層を挟んで位置する。本層は箱根火山南東部に広がっていると推定されるが，その後の厚いテフラに覆われて露頭は少ない。真鶴駅周辺での観察では，厚さ2 mほどで直径最大10cmの軽石とその細紛，黒よう石片，古期外輪山溶岩片とからなる。軽石は伸長した気泡をもち有色鉱物は少ない。

この軽石流堆積物で特筆すべきことは，中部から下部に粗粒の軽石の密集した団塊を含んでいることである（写真1）。団塊の直径は1 m前後のものが多く，輪郭は不規則で，軽石流の流動停止直前にできたと思われる割れ目も所々で見られる。団塊中の軽石は分級が良好で，降下軽石堆積物の様相を呈し，軽石流の流下に伴なってとり込んだものである。

この団塊中の軽石は，下位の真鶴軽石と鉱物組成の点で似ているものの，粒度組成は真鶴軽石よりも細かく，真鶴軽石層に見られる噴火単位ごとの層状構造も見られない。

軽石流堆積物の最下部には，厚さ2～3 cmほどの降下火山砂があり，軽石流の流出直前に先駆となる降下物の噴出があったことを示している。この降下物の本体が団塊としてとり込まれている降下軽石である可能性が強い。多分，先駆としての降下軽石の分布域と軽石流の分布域が異なることによるものであろう。

軽石流の流動機構や軽石塊の捕獲場所を考える上で興味があるとともに，本軽石流の流出が箱根火山の発達史を論ずる上でも重要と思われるので，ここに略報するものである。

文　献

久野　久　1952　7万5千分の1地質図幅「熱海」および同説明書，地質調査所，東京

町田　洋・新井房夫・村田明美・袴田和夫　1974　南関東における第四紀中期のテフラの対比とそれに基づく編年，地学雑誌，83：302—338.

（大涌谷自然科学館）

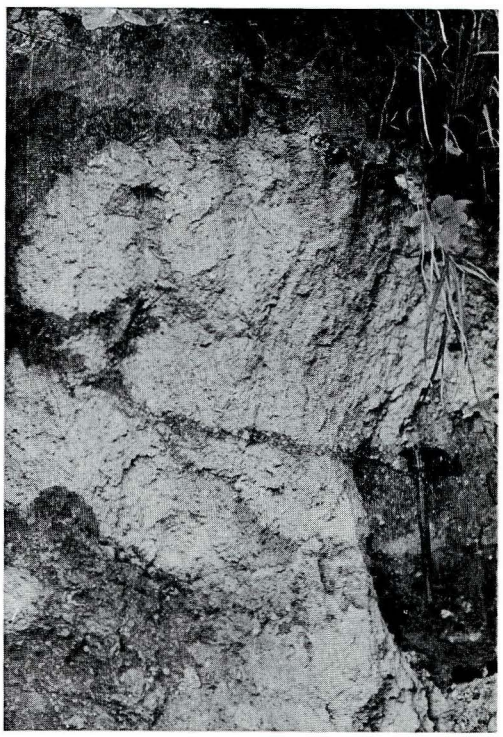

写真　真鶴駅裏に露出する捕獲団塊の割れ目に軽石流の細紛が入りこんでいる。